画家ドガの踊り子を誕生させたパステル

LA MAISON DE PASTEL
ラ・メゾン・ドゥ・パステル（フランス）

色彩の錬金術師が微笑む パリ最古のボザール

パリ・コミューンという激動の18世紀。保守的な色を濃くしたパリのサロンや画壇に対し、自らの生涯をかけて、挑戦し続けた巨匠エドガー・ドガ。その背景には、人間の生き様をありのままに描くことを追求した哲学と、それを可能にしたパステル技術がありました。

1834年7月、日差しが強くなる初夏のパリに、裕福な家庭の長子として生まれたドガは、名門「ルイ＝ル＝グラン」校で古典教育を受けました。上流階級として厳しくしつけられたこともあり、ドガは劇場という名の社交場によく足を運んだといいます。装飾が施された馬車から、すっと姿を現した麗しい紳士淑女が、吸い込まれるように入っていくパリのオペラ座。名誉を守るため、当時の貴族は競い合うように席の予約をしました。しかし、ドガがオペラ座に通ったのには、別の理由がありました。

その一つが、芸術家として光と構図を研究すること。一つ一つの要素によって作られる構図、近景と遠景。そして計算しつくされた劇場の光。モネが自然の中で振り注ぐ太陽光を愛したことと対照的に、ドガはこの人工的な光に魅せられていったのです。また、花形のオペラではなくバレエ、とりわけ、その舞台裏に注目。劇場という完成された空間の外で、汗を拭ったり、手紙を読む踊り子たちの日常生活を注意深く観察し、豊かに表現しました。

絵画の中の踊り子は、窓から差し込む光を背景に幻想的に浮かびあがり、雪のようなチュチュの白色に、鮮やかな青や赤のリボンが目立ちます。また、バレエの臨場感や動きの変化を描くため、画面の端にいる人物をあえて切ったり、近景と遠景を対比させるなど工夫をしています。完璧なまでのデッサン力と踊り子の一瞬を再現したドガ。実現可能にしたのは、色彩豊かなパステルでした。

パステルは、油彩画に比べて乾きが速く、視力の弱いドガには適した画材でした。ドガが踊り子をメインに描き始めたのは、1870年代半ば。同時期に、パステルへの

ポンピドゥー・センターに所蔵されている『ラ・メゾン・ドゥ・パステル社』のパステル・コレクション。最盛期には、1800色のパステルが製作されていた。

ドガ愛用のロシェのパステルボックスは、オルセー美術館が所蔵。

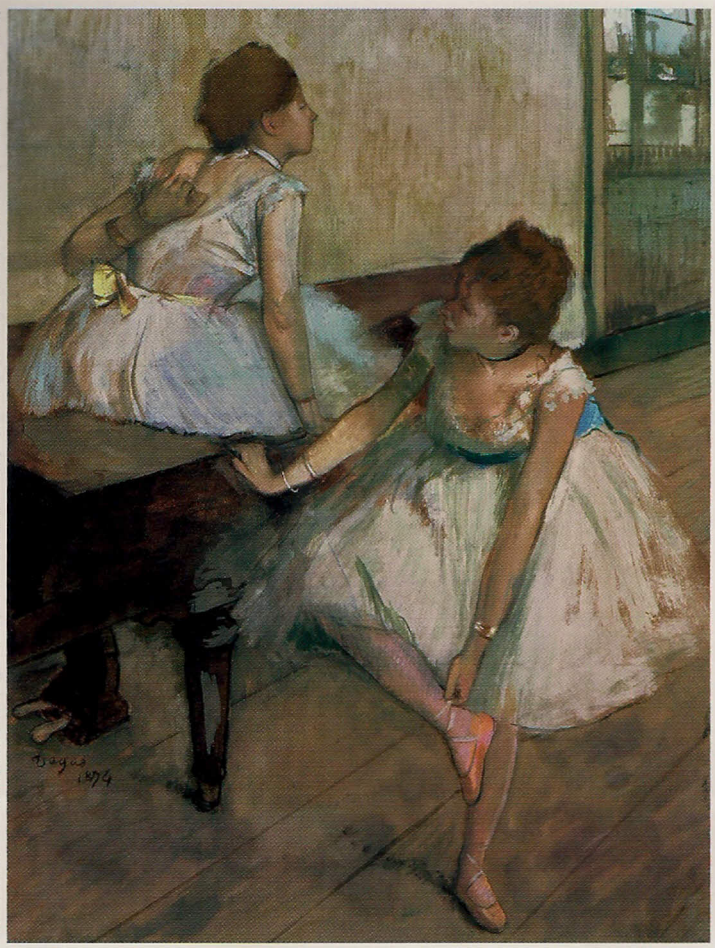
傾倒に拍車がかかり、独創的な技法を次々と生み出していきます。

例えば、パステルをそのまま使うだけではなく、その粉末を水で溶いたり、紙でできた擦筆を使って色のぼかし効果を表現していきます。パステルの澄んだ明るい色彩を引き出すためです。

こだわりは、カラーバランスにも及んだため、パステル職人とドガとの議論が終始絶えませんでした。ドガの鋭い感性を具現化できるほどの技術は、まだ広く普及していなかったのです。

しかし、注文の多いドガの要求に応えた工房がたった一軒ありました。それが、ラ・メゾン・ドゥ・パステルです。光に負けない強い色調と、固定材に頼らない定着性は、当時多くの画家から「奇跡だ」と絶賛されました。気難しいドガも、柔らかな雰囲気をもつパステル職人アンリ・ロシェとは、多くの意見を交換した間柄。ロシェは、「ドガの要求が、私自身のパステル製作に大きく貢献した」と後に記録しています。1937年、改良を重ねた1650色のパステルをパリ万国博覧会に出展したラ・メゾン・ドゥ・パステルは、見事に金賞を受賞。その名声を確固たるものにしました。その後、画家ひとりひとりのニーズに応えるため、特別顧客を主な対象とする経営方針に移り変わりました。同時に、パステルの製造方法も、一族以外は知ることのない門外不出の知識と技術になっていったのです。

今も画家であふれるランビュトー通り。かつてドガが愛したロシェの伝統は、歴史を刻んだ20番地の石畳の先、左手奥の空間で微笑む色彩の錬金術師イザベル・ロシェの心に宿り、優しく輝き続けています。



パステルを使用することで、ドガは踊り子のチュチュや一瞬の動きを、美しくかつ正確に表現することを可能にした。

33P・表紙4©Pacific Press Service

1シリーズに、豊富なグラデーションがある。

パリ3区ポンピドゥー・センター付近のランビュトー通り20番地。ラ・メゾン・ドゥ・パステルの看板が掲げられている。

お店で迎えてくれるのは、イザベル・ロシェさん。パステルの製作時間を確保するため、開店は木曜日の午後2時から6時まで。要予約。

アトリエに息づくパステルの伝統

1720年創業のラ・メゾン・ドゥ・パステル社。会社のロゴであるドラゴンと麦の穂は、はるか昔、錬金術師が技術の守り神として崇めた言い伝えに由来しています。パリで最も古い工房が、その長き伝統を今に託せるのも、技術の神から庇護されている証なのかもしれません。

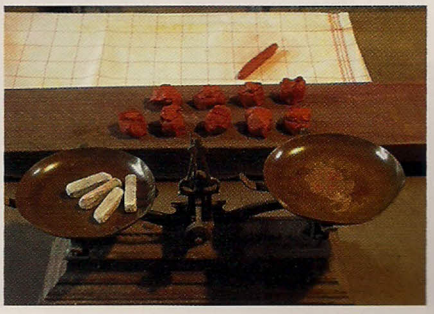
色彩の錬金術師という名をもつ現在の職人イザベル・ロシェは、パリから南西60kmほど離れた古い工房で、パステルを作っています。下地は、顔料を混ぜ合わせ、水と結合材を加えるところから始まります。次に、白と有彩色のペーストを一定の割合で混ぜ、9段階の色のグラデーションを作ります。それを人力プレス機にかけ、余分な水分を取り除き、スティックにします。とても重いプレス機は、女性の力で回すのには一苦労。それでもイザベルは「このパステルは私にしか作れないもの」と黙々と作業を続けます。愛情が込められたパステル

工房で制作された567色のパステル。

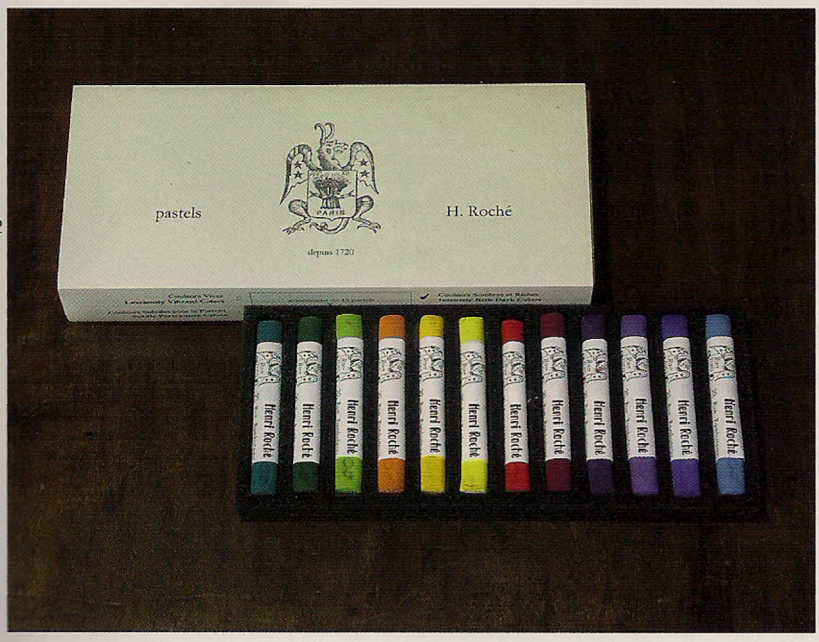
外国の海からインスパイアされたブルー。

中世の錬金術師が出現しそうな工房でイザベルは毎日パステルを作る。

パステルのペーストは丸めて重さを図り、スティックにする。そしてロシェのパステル商標〝ROC〟のマークを刻印し、乾燥させる。



パステル3色　1万3125円～　お問い合わせ　ヨーロッパハウス　03・3541・1461



パステル12色　4種類　4万4100円～6万3000円

画家のインスピレーションを刺激する567色のパステル。パステルには一本一本ROCのマークが刻印されている。

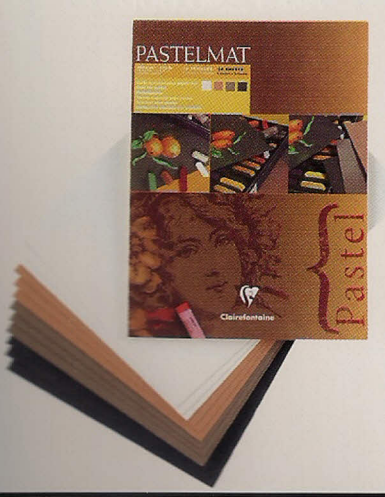
パステル72色　3種類　34万6500円～

は、寸法が人の指のサイズとほぼ同じでそれゆえにアーティストの第6の指として機能するといいます。パステル画家のE・カイルが「ロシェが事業を中断したら、私は制作を断念する」というほど、イザベルの作るパステルの色と質感の良さ、繊細さは第一線で活躍する画家にとってインスピレーションの源になっているのです。

完成品は前世紀と同じくランビュトー通り20番地のお店で販売されています。柔らかな木のぬくもりがあふれる空間には、樫の木箱に収まった567色のコレクションがあります。このパステルの聖地で心を打たれ、ラ・メゾン・ドゥ・パステルを日本に紹介すると決めたのが、ヨーロッパハウスの高橋美記さん。

「美的感覚を刺激する画材は、絵を書くすべての人にとって、人生のパートナー選びそのもの。だからこそ、納得いくパステルを手にしてもらいたい」

と高橋さんは願います。自らの第6の指となり、創造力の解放を約束する『ラ・メゾン・ドゥ・パステル』。色彩の錬金術師が作るパステルが、今、日本のアーティストを新たなる世界へと導きます。



パリ　ボザールの人気商品クレールフォンテーヌ社のパステルマット紙。固定材を必要とせず、顔料のカスがほとんど残らないことが特徴。3360円